

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 27 年 5 月 29 日現在

機関番号：32704

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2012～2014

課題番号：24530743

研究課題名(和文) リジリエンスによるソーシャルワーク実践方法の開発的研究 - 国際連携研究を通して -

研究課題名(英文) Study on resilience for developing social work practice model: through an international cooperation study

研究代表者

秋山 薊二 (Akiyama, Keiji)

関東学院大学・文学部・教授

研究者番号：50133575

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 4,000,000円

研究成果の概要(和文)：リジリエンスは困難やストレスに遭遇した際の健全な適応を果たす子どもの適応過程、能力、行動様式に関する研究概念であった。逆境・難事に遭遇しても社会的適応を維持する個人のメカニズムを応用し家族・地域へと対象範囲を広げ、ソーシャルワーク実践枠組みとして体系づける研究を行った。とりわけ震災による津波被災地の地域のリジリエンスを調査することにより、実証的にミクロ・システムからマクロ・システムのリジリエンスを統合し、もってソーシャルワークの支援方法として体系化を試みる研究めざし諸外国の学術研究結果を渉猟した。そこから、リジリエンス視点に基づくソーシャルワーク実践方法の新たな枠組みの生成が可能になった。

研究成果の概要(英文)：Resilience refers to individual's processes of, capacity for, or patterns of positive adaptation during or following exposure to adverse experiences. The theoretical frame work for resilience research with children drew on developmental systems theory, the principles of developmental psychology and ecological model of development. In this broad and integrative perspective, resilience arises from processes of interaction across multiple level of functioning. This connotes that the resilience is capable to construct a new paradigm for social work practice. The research made here is to construct a new social work frame of reference by resilience perspective which covers from micro to macro systems. Community resilience is clearly seen as mezzo system functioning. It is noteworthy that this research has reached the point that resilience seems to be a useful perspective for the theoretical social work practice model.

研究分野：ソーシャルワーク実践方法論

キーワード：リジリエンス アドバーシティ コミュニティ ソーシャルワーク 災害 人と環境

## 1. 研究開始当初の背景

(1) リジリエンス概念が北米の児童発達学・児童心理学の世界で用いられていた。その内容は逆境や困難(adversity)に遭遇しながらも健全に適応し発達する人格や適応を果たすプロセスの心理学的研究であった。個人、とりわけ子ども・若者を対象とした支援方法であると見られた。

(2) リジリエンス研究の前段にリスク研究がある。リスク研究が行われてきた背景には、個人の発達や情緒的な安定には多くの要素が影響を及ぼすと考えられており、健全な発達や精神的健康を阻害し、情緒的混乱・不適応を起こすと思われる要因(リスク)を探求する研究が、問題発生を防ぐ(予防)方法・要素の探求を目指して行われた。Werner(1989)の研究はその典型であった。日本においても、子ども虐待に到るリスク要因の研究は進められている。そこには、後に述べるが、ソーシャルワーク、社会福祉、臨床心理などの学問は生活上の問題が顕在化した人々を対象にする特有のスタイルがあった。この研究スタイルは問題解決を一義的に志向すると言う、止む得ない面がある。しかし、多様な分野でのリスク研究が進むと、リスク要因を持ちながらも発達や社会的適応の問題を表さない人達がいることが分かってきた。この研究成果を生かしてリジリエンス研究を進展させたのが、Garmezy & Rutter(1994)だと言えよう。

彼らは、リスク要因を持ちながらも問題を起こさない人達が持つものとして、保護要因(protective factor)を提示し、リジリエンスのメカニズムを明瞭にする役割を果たした。

(3) Michael Ungar(2012)の著書 The Social Ecology of Resilienceにより、環境、文化、生態を捉えながら、とりわけ社会資源へのアクセスと連携が社会的・文化的な意味を生成し、トラウマや危機からの克服・回復のリジリエンス・プロセスに作用する要素として社会生態学を基礎に据えて、リジリエンスが使われていることが分かる。即ち、個人と社会生態の相互作用、交互作用によってリジリエンスは発揮されるとしており、ソーシャルワークの新たな実践概念として組み立てが出来ると考えられた。また、この段階で Dr. Ungar 及び RRQ(Resilience Research Centre, Dalhousie University)のスタッフと知遇を得ることになり、研究交流が約束されていた。

## 2. 研究の目的

(1) 第一義的にはリジリエンスの概念の整理を行うことである。リジリエンスは日本のみならず諸外国でも分野横断的に用いられているが、その概念が表層的な“困難を跳ね返す”“逆境にも拘わらず社会適応する”と

するメタファーとして捉えられている傾向が強い。そこで、欧米のリジリエンス研究から、システム論、生態学を基礎に、多様な要素の相互作用と交互作用、ミクロ、メゾ、エクト、マクロのシステムが重層的に折り重なる社会生態システムの中で人、家族、集団、地域はそれぞれの意味を生成し、アドバーシティ(逆境・難事)に対処するリジリエンスが作り上げられることを明らかにすると共に、このような背景を持つリジリエンスの概念を明らかにすることであった。

(2) 広範な生活領域、生活システム、システム階層を収斂したリジリエンス概念が抽出できるならば、それは今日の「人と環境のソーシャルワーク」と比肩しうる、ある意味ではこれを凌ぐ新たなソーシャルワーク実践枠の構築の可能性を意味する。従って、リジリエンス視点に基づくソーシャルワーク論の枠組み作成を目指すものであった。

## 3. 研究の方法

文献研究、研究情報交換、検証研究の3種類に分けられる

(1) 文献研究は主に北米で刊行されているリジリエンス関連図書、学術論文を渉猟した。とりわけ日本の研究は児童発達、精神保健分野のリジリエンス尺度に関する研究が主流であった。そこで、地域、災害、環境分野のリジリエンス概念を開拓的に整理する。また、研究情報交換として、Michael Ungar 及び RRC のスタッフとの知遇があったため、2013年3月にはRRCを訪問しリジリエンス研究の調査方法、異文化圏におけるリジリエンス生成の違い、リジリエンスを発揮する要素の調査方法とその尺度に関する研究成果の情報を得た。

(2) 国際研究交流として、2013年10月5日「リジリエンスの多様性とその探究」をテーマにリジリエンス横浜国際セミナーを開東学院大学関内メディアセンターにおいて開催した。Ungar と Liebenberg を招き日本の研究者を含め、心理、家族、地域、社会防災とマルチなシステムを組み込んだリジリエンスに関する知見を交換した。これはソーシャルワークの対象として個から集団・地域・社会を捕捉する、予備概念設定による準備を念頭に置いた国際セミナーであった。

(3) 地域のリジリエンスの検証調査として、東日本大震災大津波の被災地調査を行った。岩手県沿岸部12市町村は10メートル級の津波に襲われるが、その中で2町村のみが人的被害をゼロに抑えた。この大津波をadversityと見なし、犠牲者を出さなかった町村をリジリエンス(難事に遭遇しながらもそれを回避・克服)を発揮したコミュニティとして、その地域が持ち、有効に作用したと

思われるポジティブな要素・要因について調査を行った。この様なセッティングが与えられ、レジリエンスの保護要素を地域のレベルで調査出来たのは極めて幸運であった。

#### 4. 研究成果

(1)文献調査・研究情報交換から、レジリエンスは個人のみを対象にするのではなく、地域を含む社会全体を包摂する概念であることが分かる。取りわけ、文化、環境、気候、地理などが、独特の生活環境、生活世界を作り上げており、これらを含めたソーシャルワーク実践の枠組みが求められることが判明した。都市部、農村部、漁村部、山間部など、地理環境による生活文化のあり様は根本的に違うことが判明する。これらをソーシャルワーク実践に生かす必要性が認識された。

(2)東日本大震災大津波被災最小限地域の調査から地域のレジリエンスは存在し、それを構成する要素は 地域の歴史と地域特性の認識、高い防災意識の保有、地域住民連携態勢の整備、物的インフラストラクチャーの整備の高さ、高いソーシャルキャピタル(社会関係資本)の保持などが認められた。ソーシャルワークは防災対策について行政に提言が出来るかどうか、疑問であるが、住民の方々が逆境・悲惨に陥ることへの予防策として、今後の課題として考えなければならない。分野に限らず、一般にソーシャルワークは「予防」という発想が希薄であったことは事実である。

(3)レジリエンスは個人(生き方、生活対処法、健全な成長など)のみに当てはめる概念ではないことが明瞭になった。レジリエンスの意味はおおよそ次の三つに分類することが出来ることが判明した。Overcoming(克服・回避):アドバーシティに遭遇しても、それを躲(回避)し、あたかも何事もなかったように克服すること。英語では、“overcoming the odds”と表現されるが、“不利な条件を克服する”“劣勢を撥ね除ける”と言う意味である。正にレジリエンスの原義を言い表した表現である。Sustaining(維持力・持続性):アドバーシティに遭遇し困難な状況に陥るが、本来の能力や機能性を維持すること。時にこれを耐性(tolerance)もしくは抗力(resistance)と呼ぶ。Recovering(回復):大きなアドバーシティに遭遇し経験した後、トラウマや困難な状態から機能や能力の再獲得もしくは新たな対処力を獲得すること。

この三つを糾合することにより、レジリエンス視点のソーシャルワーク実践枠組み作成の展望が開けた。

(4) 更にレジリエンス思考の発見がある。「レジリエンス思考」とは「形態を変え

ることなく、外から入り込む混乱や攪乱を吸収するシステムの許容力(capacity)を考察する視座」と要約することができ、その主要テーマはシステムの持続力(sustainability)である。「レジリエンス思考」は、レジリエンスを重層的にとらえ考察する。それらは( )特定された(specified)レジリエンスと( )一般的(general)レジリエンスである(Walker & Salt, 2012)。( )特定されたレジリエンスとは、システム論というシステム設定のことであり、あるサブシステムにかかる特定の衝撃に対する回復力を指している。一方、( )一般的レジリエンスとは、あらゆる種類の攪乱を吸収するシステム総体の許容力を指し、このレジリエンスを高める要素として、多様性、開放性、予備性、確固なフィードバック、構造化、余剰性などが挙げられている。生態学にシステム論が根付き、システム攪乱要素の排除や吸収し機能を維持するロバストネス(robustness)を論じているものと思量される。

「レジリエンス思考」は、人がアドバーシティに直面した時、適切に適応する特定システム(たとえば個人の生活システム)の回復のみではなく、地域を社会資源・自然・地理を含む社会生態として広角的・複眼的にとらえ、コミュニティ、生活、人を統合的全体として把握することを可能にする。またレジリエンス思考においては、従来のソーシャルワーク及びレジリエンスが探究する問題解決とポジティブな適応・回復の結果(outcome)に持続性と予防性(preventive nature)を包蔵させており、ソーシャルワーク実践の枠組みを構成する上で極めて有効であると推断を下すことができた。

(5)ソーシャルワーク実践で現在使われているエンパワーメント、ストレングスの視点やアプローチは、「~~~をすること(パワーをつける、持っている強さを認識し自信を持つ)によって、~~~の状況が改善し、立ち直り自立が可能になり生活が安定調和へと導かれるであろう」とするいわば理念や思想、時には現場の経験知に由来する「予定調和説」であった。レジリエンスは逆境を乗り越えた人々が保持していた保護要素を重視する。それは既に逆境・ストレス・難事を克服もしくは困難な状況から回復した実績を持つ要素である。本研究者の造語であるが、いわば「実績調和説」の立場に立つことが判明した。即ち、実績のある困難の克服、回復に貢献した要素をソーシャルワークの支援方法、支援方針として導入して行く戦略を取ることになる。実績のある要素を用いた方法により支援を展開するのであるから、その有効性は高いと思われるが、その検証は今後の課題となろう。従って今後、ソーシャルワークは逆境・難事を乗り越えてきた人を対象にする研究が求められることになる。

対象の広範化とシステムの階層化、概念と枠組みの明瞭化により、レジリエンス視点によるソーシャルワーク実践方法を構築する基礎が出来上がった。

研究期間終了段階の2015年5月の段階で成果として記載出来る論文発表は1本であるが、本年の夏にかけて、2本の学術論文の作成を進めている。また、本理論研究は他の研究者が研究代表となる科研助成研究(2015-2018年)が採択され、研究分担者として加わることになったことから、ソーシャルワーク分野からのレジリエンス理論研究は本研究の成果を基に今後も継続することになる。

#### <参考文献>

- Werner, E. (1989) High-risk children in young adulthood. A longitudinal study from birth to 32 years. *American Journal of Orthopsychiatry*. 59(1) 72-81.
- Garnezy, M. & Rutter, M. (Eds.) (1994) *Stress, Risk, and Resilience in Children and Adolescents: Process, Mechanism, and Interventions*. Cambridge University Press.
- Ungar, Michael (Ed.) (2012) *The Social Ecology of Resilience: A Handbook of Theory and Practice*. Springer.
- Walker, B. & Salt, D. (2012) *Resilience Practice: building capacity to absorb disturbance and maintain function*. Island Press.

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

#### 〔雑誌論文〕(計 1 件)

秋山 薊二、自然災害にみるコミュニティのレジリエンス、関東学院大学文学部紀要、第132号、2015(掲載決定、頁未定)

#### 〔学会発表〕(計 2 件)

Keiji Akiyama, *Communities that Prevented Loss of Human Life During Japan's 2011 Tsunami: Lessons for Human Service Provider*. Dalhousie University, Canada. Hosted by CYCC Network, Dalhousie University. 2014, May 1<sup>st</sup>.

秋山 薊二、ソーシャルワークにおけるレジリエンスとシステム理論 - メゾシステムに見るレジリエンス -  
レジリエンス国際セミナー、関東学院大学レジリエンス研究情報センター、関内メディアセンター、2013年10月5日

#### 〔図書〕(計 0 件)

#### 〔産業財産権〕 出願状況(計 件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
国内外の別：

#### 取得状況(計 件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
取得年月日：  
国内外の別：

#### 〔その他〕

ホームページ等  
レジリエンス研究情報センター：  
<http://home.kanto-gakuin.ac.jp/~resile/index.html>

#### 6. 研究組織

##### (1) 研究代表者

秋山 薊二 (AKIYAMA, Keiji)

関東学院大学・文学部・教授

研究者番号：50133575

##### (2) 研究分担者( )

研究者番号：

##### (3) 連携研究者

副田あけみ (SOEDA, Akemi)

関東学院大学・文学部・教授

研究者番号：60154697

澁谷昌史 (SHIBUYA, Masashi)

関東学院大学・文学部・准教授

研究者番号：80460145

##### (4) 海外共同研究者

Michael Ungar (Dr.)

Resilience Research Centre(RRC),

Professor of Dalhousie University

Linda Liebenberg (Dr.)  
Resilience Research Centre(RRC),  
Adjunct Professor of Dalhousie  
University.